

355 中央大学辞達学会主催聯合大演説会

〔「法学新報」第24巻1(271)号 大正3年1月1日〕

○中央大学辞達学会 中央大学辞達学会の主催に係る都下大学並専門学校生徒聯合大演説会は去る十一月二十九日午後一時より同大学大講堂に於て開かれたり都下最大の称ある此講堂も定刻前既に傍聴者を以て満たされ二時に至るや場の内外立針の余地なく已むなく入場謝絶の掲示を出し幾多の傍聴者を謝絶してむさむさ入口より引き帰らしむる如き実に近年見る能はざる盛会なりし聽て定刻に至るや司会者真塩君の紹介に依りて本会副会長堀江弁護士登壇、開会の辞を述べ氏は開口一番現下の急務を説き国民の反省と自覚とを促して喝采場裡に降壇、次て「古

を見るを得たるは佐藤幹事か委員諸氏の督励其宜しきを得たる  
に因らすんはあらず末筆ながら感謝の意を表す（委員報）

きものより」と題して東洋大学生高松実亮君起つ、揚らざる風  
采と元氣なき口調とは能く氏の題意を表し極めて仏臭き感あ  
り、明治大学生弓家七郎君は「生活難」と題して苦苦しき声を  
張り上げ其真状を究む、法政大学の上田久太郎君登壇するや彌  
次連所所より反言を送り盛に妨害を試むれども馬耳東風悠然と  
して「法律とは何するものか」に付て論及し専修大学生松原寛  
制君は「戦争論」に付て大に論ずる所ありたれども彌次隊の反  
駁愈々甚しく場内激囂を極め中途にして降壇の止むなきに至れ  
り此時司会者は殊更に改まりて『本年高等文官試験に及第せる  
所の中央の鏡将高木三郎君か「官私学の特徴を論じて試験制度  
改正に及ふ」と題して名論を吐かるるに付き謹聴を望む』と事  
勿体らしく紹介するや聴衆俄かに寂然として恰も暴風の去りた  
るか如かりき此時高木君は悠悠として壇上に立ち三十分はかり  
奇弁を吐きて聴衆を酔はしめたり日本大学生自須皓君は「自発  
的精神」、農大の針谷伏君は「現社会を見て」と題して何れも  
妙弁を振はれ次で「東亜の風雲」と題して慶応の辻三郎君は満  
腔の熱誠を吐露し其態度より見るも論拠よりするも当日第一と  
称すへきなり、次に無題にて茅原華山氏登壇、怪弁を吐くや場  
内割るるか如き喝采、次で岡田代議士は数十分間程卓説を述べ  
早大の松枝保二君は「正当なる輿論の指導者」、一高の世良田  
進君は「タンホイゼルの悲と愛の權威」と題して大に熱弁を振  
はれ本会副会長高崎介藏氏は「成功者ジヨウジ、パイボデイ」  
に付て約一時間聴衆の機嫌を取りつつ拍手の裡に降壇し真塩氏  
起つて閉会の辞を呈し午後七時散解せり因に当日斯の如き盛会